

ドイツの口承文学における異教的（ゲルマン的）要素

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2013-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 正彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14388

ドイツの口承文学における異教的
(ゲルマン的) 要素

吉田正彦

Was ist heidnisch?

—zwischen Christentum und Germanentum—

Masahiko Yoshida

「青ひげ」の誕生

グリム兄弟は「子供と家庭のための昔話」の第一巻を1812年に公にした。三年後には第二巻を刊行、合せて二百編の昔話を収録する。1822年に出版された第三巻「注

釈]編を含めて全巻が整う。しかし前二巻の第二版(1819年)及び後の版では、前の版に取められた幾編かが他の物語と挿し替えられている。初版第33話「長靴をはいた牡猫」、62話「青ひげ」などがそれであり、20話を超えるはずである。それらが二版以降で省かれた理由として、兄弟の昔話収集の本来の意図からはずれていたためである、という。つまりドイツ本来の伝承ではなく、たとえばフランス、あるいはスコットランド語から兄ヤコブが翻訳したものなどが多く含まれている。また、その幾つかはフランスの、それも17世紀末のシャルル・ペローによる『過ぎし昔の物語ならびに教訓』に由来する口承であるからだ、ともいわれる。もっとも理由は別にして、ペローにも取められた「赤頭巾」「いばら姫」はそのまま第二版以降に残されるのであるが。

ところで「赤頭巾」については、それが残された理由を Hans = Wolf Jäger が論文 “Trägt Rotkäppchen eine Jakobiner-Mütze? Über mutmaßliche Konnotation bei Tieck und Grimm” (1974) において大胆に推測したことは既に述べた通りである(『芸文研究』第61号)。グリム兄弟が「赤頭巾」をハッセンプフルーク家のジャンネット及びマリーの姉妹から採集した時代を背景に、兄弟の対フランス感情、フランス占領軍に対する民間ドイツ人の、時を追って変化する共感と反撥等々、これらを意図的に盛り込む器として、兄弟は「赤頭巾」を利用し、再版にも残した、というのがイエガーの主張であった。それなら兄弟は「青ひげ」を、同様の、あるいは何らかの目的を果たすための「器」とは考えなかったのであろう。

弟ヴィルヘルム・グリムは

「考えが何の思い患うことなく思い浮んでくることがあるように、素朴で自然であるために、どこにあっても繰り返される状況というものがある。それ故、同一の、あるいはとてもよく似た昔話がどこの国にも、お互いに別々に生れることができたのである」

と述べ、昔話の比較研究の端緒を開く。これは後にアンティ・アールネ、ステイス・トムソン等が昔話のタイプ(型)やモチーフによる分類を企てることと行き着くことになり(A. Aarne: Verzeichnis der Märchentypen 1910; A. Aarne, S. Thompson: The Types of the Folktales 1927; A. Thompson: Motiv-Index of Folk Literature 1932-36)、私たちは、例えばグリム童話「ブレーメンの音楽隊」がわが国の昔話「猿蟹合戦」と同一の「型」を持つことを知ることができるのである。因みに「青ひげ」については、アールネ=トムソン『昔話の型目録』により、本格昔話のA、魔法の話第

312話に分類される。

さて、ペローはその昔話集を当初は『がちょうおばさんの話』(Contes de ma mère l'oie)と題して、出版に先立つこと2年前の1695年にルイ十四世の姪に献上した。これは「昔の、信じ難い話」に対して用いられたフランス語の言いまわし、つまり「王妃ベルタがまだ糸を紡いでいた頃のお話」の由である。ベルタとは「がちょうの足をした」(au pied d'oie)との異名をとった、ロベール二世(敬虔王)の妻の名であるが、これが民間では伝説や叙事詩で知られたシャルルマーニュの同名の妻と混同される。その結果、「がちょう」は鳥そのものではなく、シャルルマーニュ、あるいはその妻のいた時代のような「大昔」を表わす言葉となった。即ち『がちょうおばさん』なる表題を付すことにより、ペローは計らずも、彼がその童話を民間に伝わる伝承によったことを暗示している、と考えられる。もちろん彼は、主君の姪内親王へ宛てた献呈の辞及び1697年版の序文に記すように、当時の子供たちを教育する目的でこれらを自ら翻案、脚色し、教訓まで付したのであったが。

私たちの「青ひげ」ももちろん、フランスにのみ伝承されたわけではない。ドイツや東欧を含むヨーロッパ全域、アフリカ、インド、北米にも同じモチーフ(「妻殺し」)の話は伝わっている。もっとも、特にフランスではペローの作品から再度口承化したものも多いと言われるが。グリム兄弟はなぜこれを彼らの昔話集から削除し——そして同じハッセンプフルークの姉妹から聞いた「赤頭巾」を残したのか。先ず第一に言えることは、第一版に取められた「青ひげ」物語はペローのそれと余りにも類似し過ぎていることであろう。「赤頭巾」には狩人の出現、彼による少女と祖母の救出、後日談など、——ルートヴィヒ・ティークの影響は見られるにしても——明らかにペローと異なる点が多く認められることに比べれば、「青ひげ」の削除には明らかな理由が、昔話収集に当たっての兄弟の基本的な態度から考えて、あったと言わざるを得ないであろう。ペローとの類似のみならず、後の研究により、彼らに「青ひげ」を語り聞かせたハッセンプフルーク家の人々がフランス・ユグノーのドイツ亡命者をその祖としていることが明らかにされたことから、兄弟の措置の正しかったことは証明されよう。昔話集第三巻初版にはこの第62話について、ペローの物語、またその翻訳と思われるスウェーデンのそれについて述べた後に、兄弟が自ら耳にした話の特徴を次のように説明している、

イ) ペローに見られる、姉アンが登場しないこと

ロ) そのかわりに、血の付着した鍵を干草に隠す場面

が挿入される。これは、干草が血を吸い取る、というドイツの民間信仰に基いている

- ハ) ドイツの民謡——A. アルニム, C. プレンターノ『少年の魔法の角笛』, ヘルダー『民族歌謡論』など——にも同じ伝説が歌われているが、<青いひげ>については言及されない
- ニ) ハンブルクに剛髯の男の話が伝わっているが、これは「青ひげ」のことであろう。兄弟の住むカッセルにも、この名の職人が知られている
- ホ) 明白な関連性は指摘できないが、スコットランドの伝説、また『千夜一夜』の第66夜などに類似した話がある

等として、彼らの第一版に収められた「まっしろ白鳥」(Fitchers Vogel), 「人ごろし城」(Das Mordschloß) を類話として挙げている。但し、前者は第46話として後の版にも残されるのだが、初版に第73話として収められた後者については、兄弟の妹ロッテの親友であるオランダ人女性ド・キンスキーから採取した口承としながらも、これがオランダの話であるとして第二版では削除されている。この間の事情については第三巻の1856年版、第46話の注に、

「明らかに私たちの昔話（「まっしろ白鳥」のこと）は青ひげの伝説を含んでいる。私たちはその話を勿論、はっきり聞いて、初版第62話で伝えたのであるが、それがペローの「青ひげ」とは、幾つかの欠けている部分があるという点と、特別な状況が異なるだけであり、また私たちがそれを聞いた地域ではフランス語が知られている、という事情もあって、決断がつかないままに（第二版に）入れることをしなかった」とし、上記イ、ロをも付記して少々残念そうなのだが、更にハンブルクの剛髯のケースと、上記ニ) のカッセルの、せむしで半ば気の狂った職人の例を挙げた後、青ひげとは黒いひげの男のことで、純潔な乙女の血で浴することにより治癒するといわれる、癩病のような病気に本来は関係があるのだらうと、中世の騎士叙事詩『あわれなハインリヒ』を参照せしめている。

先に述べたように後にアールネ、トムスン等により、昔話はその型及びモチーフによって多様に分類されるのだが、グリム兄弟がその注釈に記した、以上の点と対比させる時、兄弟が必ずしも不適切な指摘をしたわけではないことが分る。イ及びロはペローとの相違点を強調して、これをドイツ独自の昔話と認めるための論拠として挙げているのであるから、除外しなければならない。とすれば先ずハ、ニの二点である。マッケンゼン編『ドイツ昔話ハンドブック』—これは第三巻<Gyges>の項

で中断されたままとなり、第二次大戦後 K. ランケ等の『昔話百科事典』(1975年以降、目下第五巻迄刊行)に引き継がれた——のフォレッチュによる<Blaubart>の項によると、「青ひげ」は

- 1) 狭義では、青ひげを生やした妻殺しの物語で、ペローまたは彼の話の基となった口承と密な関係を持った話
- 2) 広義では、(これがアールネ、トムスンの分類と結びつくのだが)「開けることを禁じられた部屋」及び「脅かされた妻の無事な救出」の2つのモチーフを伴った、諸々の「妻殺し」型の昔話
- 3) 上記2のモチーフのどちらかのみをもつものとしては、

あ) 「開けることを禁じられた部屋」のモチーフのみのケース: 「マリアの子ども」(グリム童話第3話) によって示される昔話群

い) 「妻殺し」のモチーフのみ: Ulingertyp と呼ばれ、ドイツ、スカンディナヴィア、フランス、イギリスなどに伝わるバラード群

- 4) どちらのモチーフも持たず、独自の昔話の型を示すが、「青ひげ」の型としばしば関連がある「盗賊婿」の昔話群

と説明される。1のペローに示されるのがいわゆる「青ひげ」の基本型であるが、アールネ・トムスンによる『昔話の型目録』ではこれは AT 312 「大男退治と犬」型として示される。(先に示した数字がこれである)。これを更にモチーフあるいはエピソードにより細分すると次のようになる(小沢俊夫『世界の民話』解説編):

I 禁じられた部屋

- (a) ふたり姉妹が次つぎに人食い鬼の手中に落ち、かくれた城に連れていかれる
- (b) 娘たちはある部屋に入ることを禁じられる
- (c) 娘たちは禁令に従わず、卵または鍵に血がつく

II 罰。人食い鬼が娘たちを不服従のゆえに殺す

III 末の妹による救出

- (a) 末の妹が死体を発見する

ここ迄は AT 311 「妹による救出」と共通で、AT 312 には独自に、

- IV 死の危険にさらされた娘がお祈りのためにしばしの猶予を乞う。兄が動物たちの助力で鬼を殺す、そして妹を救出する

つまり AT 312 = I a + b + c + II + III a + IV の形で公式化される型であって、フォレッチュの2とは、I b, III a, IV で異なる。このように見てくると、グリムの「青ひげ」は確かに兄弟自らの注イ、ロの相違のみである。しかしこ

ここで注目したい点はハであって、フォレッチェの前述する3の現象に兄弟は既に気付いていたのである。では彼等の指摘する作品、たとえば『少年の魔法の角笛』等に収められた民謡「ウルリヒとエンヒエン」とはどのようなストーリーを持つのだろうか。馬で遠乗りに出掛けたウルリヒが恋人エンヒエンの家へやって来て、彼女を森へ誘う。草原に腰を下ろすと、彼女は涙を流す、「向うのもみの木に／乙女が11人吊り下げられてるのを見てしまったの…私が12人目になるのね／私に3回だけ叫び声を挙げるのを許して」。最初は父に、次に神に、そして兄に向かって叫んだ声を兄は聞きつける。遅れてたどり着いた兄は妹のことをウルリヒに訊ねる。彼はウルリヒの血に染った靴、死神のような目つきについて訊ねる。「小雉鳩を射ったからさ」——「おまえが射った小雉鳩は／私の母が胸に抱いて…懐で温めて／彼女の血で育てたのに」。その小雉鳩エンヒエンは殺され、ウルリヒは車裂きの刑に。—これは『ドイツ昔話ハンドブック』で4に示される「盗賊婿」(AT 955)の類似型と考えられるのである。基本形はグリム童話第40話で知ることができよう。AT 311 と関連した物語なのである。

ところで殺害者を青い、時には赤や緑のひげによって恐ろしい存在と特徴づけるのは、これらの話の一部分に、話の導入部として付された副次的なモチーフに過ぎない。U. プランシュクによると、16世紀の諺集では濃く黒いひげを青ひげと称した、という。兄弟は注釈のハ、ニでこの点にも気付いていた。だがペローに強調されるような、無気味で不自然な様子の謂ではない。ただわが国にも「ひげの濃い男は情が深い」というが、青ひげを生じた男は性的に異常な能力を持ち、女性を誘惑して不幸にする、と考えられた一面もあるという。1881年刊P. セビオ編『高プルトーニュの口承文芸』では主人公は赤ひげであり、妻が何らかの理由で次々に死んでしまった男が、10年を共に過し、3人の子供もある妻を殺そうとする話であって、ペローとはAT 312のIVで結びつくに過ぎない。ペローの物語に付された第一の教訓が教える「好奇心」の惹き起す残酷な恐怖は、そのかけらもない。むしろ夫婦にある日理由もなく訪れた憎悪が事件の発端となっている。またヴッケ編『ヴェラ川中流域の伝説』に収められた「ディートリヒスブルクの悪辣な騎士の話」では、「ひげ」については全く言及されず、このドイツ版青ひげの何人目かの妻となった粉挽きの娘二人は夫の命に背いて部屋を開けたために次々と殺され、12人目の妻となった末娘が知恵を働せ、姉たちの頭を証拠として父に見せて救われる。とすれば、主人公に青いひげを提供し、諺や俗信を巧みに利用したのは——「赤

頭巾」に赤という色彩を与えたように——やはりペローであったかもしれないのだ。「教訓」により、子供たちを教育しようとしたペローはまた、巧妙な心理学者でもあったわけである。ついでながらヴッケにおいて注目すべきは、先ず禁じられた部屋で血にまみれるのが鍵ではなく黄金の卵となって、ペローのように「魔法がかかった」と説明する必要もなく魔法昔話の要素を見せてくれる点である。禁断の部屋を開くことがもし性的な意味を含んでいるとすれば、余りにも現実的な鍵に比べ、卵はそれ自体が生命の象徴であることにより、むしろ直論が抽象になってしまうからである。同様のことが、末娘に部屋に入らぬよう警告を繰り返す、絹糸に縛られた白鳥にも言えよう。この鳥は最後に、兄たちに代って「青ひげ」を退治するのである。(昔話において三度繰り返される同一の現象——たとえば桃太郎に対して示される三匹の動物の恭順の情——は、聞き手の印象を強める役割を果すという。しかし三匹の動物が多数の家来を表す〈代名詞〉の意味を含むとも考えられるわけで、青ひげの最後の三人の妻も、あるいはひとりの新妻が主婦として夫との関係において経験する数々の試練を表わすのかもしれない。少女から妻への成長を。その試練を禁断の部屋が表徴している、というわけである。アラジン、あるいはアリババが禁じられた部屋に入ることに、特別な能力、または財宝を賦与されるように。)

「創世紀」においてイヴは神に禁じられた知恵の木の実を食べる。蛇が容易に誘惑できる程に最初の女性は好奇心が強かった。イヴに次いでその実を食べたアダムと共に、二人は自分たちの裸であることに気付く。ここにも好奇心に駆られて従順さを犠牲にした女性が見られる。二人は子供のようにナイーブな、無垢の状態を捨てざるを得ない運命を与えられるが、彼らはパラダイスでの永遠の生を失う代償として、自らの力で神に対比し得るはずの「知恵」をさずかる。この物語のテーマは、従順さとそれに対抗する好奇心であるとも言えよう。

「禁じられた部屋」と「妻殺し」のモチーフを併せ持った昔話が、「赤頭巾」、「シンデレラ」、「長靴をはいた牡猫」あるいは「眠れる森の美女」同様、「青ひげ」と命名されてペローによって広く知られることになったことを否定する者はないであろう。その主人公の多くは、無気味さと超自然な存在として私たちに伝えられている。彼らは巨人であり、あるいは小人であり、吸血鬼であり悪魔である。しかもその住いはしばしば地下の暗い世界なのである。つまり主人公たちは死者の国の主として登場するのである。とすれば、「白雪姫」の小人たち、あるいは『ニーベルンゲンの歌』の小人アルベリヒを想

起する迄もなく、彼らは地下の財宝の支配者でもある。主人公がきらびやかな屋敷の主であることもうなずけるはずである。ところで、シチリアの伝承“Die Geschichte vom Ohimè”に気付くべきかもしれない。ここでは三人の娘たちに死者を食うことが要求されるのである。これはかつて主張されたように、「古来の秘儀伝授の風習を象徴化した」（『日本昔話事典』）ということなのか。あるいはポリュグノートスによる冥界の図に描かれた、人間を飲み込むエウリュノモスや、生と死に関わる女神ヘカター——彼女は屍を食いその血を飲んだ、ともいう——との関連はどうなのであろうか。神話のイメージは、花嫁を次々に連れて来ては自分に対する従順さを試る食人的な地下世界のデーモンを描く昔話の源とはならなかったであろうか。因に、南スラヴ及びギリシアにも、シチリアと同様のモチーフを持つ話は伝わっている。

古代南方的な想像力が、アルプスを越えてゲルマン世界に入ると、吸血鬼、小人、巨人へと、またキリスト教支配下の世界では悪魔へと姿を変えた例は数多く見られる。事実ドイツの低ザクセン地方の「青ひげ」は小人、バルカンでは吸血鬼なのである。一方でキリスト教の一層の影響を受けたのであろう、フランスの伝承「コモル」は聖人伝説に仕立て上げられている。

グリム兄弟の指摘するような血の風呂の俗信との関連はあくまでも兄弟の想像に過ぎないとしても、もう一方のブレンターノ等の民謡に歌われる盗賊婿（少女殺し）伝承は、私たちのテーマと無関係である、とは言えない。「妻殺し」のモチーフを含むからである。先にはその一例を挙げたが、一般的にはドイツでは16世紀以降書き残されたもので、Ulinger, Ulrich, Olbert, オランダでは Halewijn と称する騎士が——その名から Ulinger 型と命名される——青ひげのように財宝によってではなく、歌によって乙女を魅了する。二人が馬に乗って森を通ると、（白鳥ではなく）鳩が乙女に警告する。更に行った時に彼女は11人の乙女が木に吊されて死んでいるのを見る。12人目の犠牲者は服を脱ぐように言われるが、3度叫ぶことだけは許される。イエス、マリア、そして弟に向かって彼女は叫ぶ。結末は伝承により異なる。弟（または兄弟たち）が来て男を倒すケース、吊されて死ぬことを望むかそれとも剣を取るかの選択を男から迫られて後者を選び、策を弄して乙女が男を倒すケースと。13世紀にはもうなくなっていた Uodalger という名に由来する騎士の稀な名から、その成立はドイツであり、また書き残される少くとも一世紀以上前のもの、との推測があるが、ドイツ及びスカンディナヴィアに伝わる殆んどの

歌謡において騎士が乙女に、

“sie solt im lausen, sein gelbes har zerzausen”

と求める点にフォレッチュは注目し、フランス語でブロンドは blond, 明るいブロンドは bloi で、12世紀には既に青 blo, bleu と混用されていたこと、そこから「黄色の (gelb)」髪、またひげは青いそれを意味し、「青ひげ」となって生き続けた、と推測している。彼によれば、中世のドイツで、ブロンド（黄色）の髪は色情殺人犯（最後に誘拐しようとした娘に殺される）の歌が成立して近隣諸国に伝わり、散文化して東洋の「禁じられた部屋」の魔法モチーフと結びつき、場面も森から城に変る。東洋の死者の頭、西欧の女性の屍、更にそれらと結びついた女主人公の危機の三つがまとまったのが「青ひげ」で、東西の両テーマが結合した場所が、あるいはフランスだったかもしれない、という。

ジャンヌ・ダルクの将ジル・ド・レー、離婚を認めない教皇に対立して英国教会を独立させたヘンリー八世、前述「コモル」の物語にその姿を反映させたブルターニュのコノモル伯爵が「青ひげ」の主人公に擬せられたこともある。彼らがその行為によってこの伝承の残虐な主人公を思い出させることは確かであるし、また各地で彼らの行為が物語に混入しているケースのあることも否定できない。だが、伝承の過程で多様な要素が混入したにせよ、物語の源はやはり民間にあったとするのが至当であろう。娘たちの心を魅きつけては誘い出し、森の中で殺すという現実の出来事が——そのようなことはしかも珍らしくはなかったと思われる——人々を震撼させ、あるいは「赤頭巾」のように娘たちに対する警告昔話となったのではないであろうか。